



戦前における家庭学校職員集団の形成と特質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003530

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質

土井 洋 一

1. 職員集団分析の意図

1899（明治32）年に創設された家庭学校は、民間の一感化施設に過ぎない。しかし、その果たした歴史的役割は実に大きい。それは、以下の三点に整理することができる。

第一は、家庭学校創設直後からの感化事業の国家的整備にあたって、その牽引力となったことである。その伏線として、刑事政策、なかんずく少年刑事政策と少年保護事業の創出とその近代化に、実験施設として大きなインパクトを与えたことである。

第二は、雑誌『人道』の編集、発刊を引き受けることによって当時の社会思潮に一定の地歩を占め、多岐にわたる人材の活用と発掘をはかることによって、慈善事業の近代化と科学化に貢献したことである。慈善事業師範部を設置して、専門教育に先鞭をつけたこと、校内に思斉塾を設けて有為の青年たちの教育にあたったことなども、その現れである。

第三は、とりわけ大正期以降の北海道社名淵分校を拠点とした、壮大なる構想に基づく実践過程を通して、今日的な課題である地域福祉のありかたに幾多の示唆を与えてくれることである。

単なる一施設の、こうした時代を貫くスケールの大きな動きは、周知のように創設者である留岡幸助によって終始一貫リードされたものである。確かに家庭学校は、幸助の吹く笛に合わせて見事に踊った。しかし、踊ったのは「家庭学校」という即物的な施設ではなしに、そこで働く職員集団である。一体どんな人達が、こんなに苛酷な労働を要求されるフィールドに何時どんな動機で勤め、何時どんな理由で去っていったのであろうか。また、留岡幸助はどんな職員をどんな理由で集めようとしたのか。そして、

彼の意図はどの程度まで達成されたのであろうか。

こうした疑問は、筆者のなかで日増しにふくらんでいった。家庭学校史に焦点を絞って考察を深めようとする限り、どうしてもこの疑問を解くことができなければならない。校長としての留岡幸助の思想と実践の跡づけばかりに専念していたのでは、激動の日本近現代史を生き抜いた家庭学校の息吹を後世に伝え、その果たした歴史的役割の全体構造を浮き上がらせることはできないからである。

家庭学校史の主要な史・資料は、膨大な量にのぼる留岡幸助の残した著作の他、学校の人的、物的組織にかかわるものであるが、どうしたわけか、職員に関するまとまった資料がほとんどないのである。公刊された職員名簿も、限られた年度のもの以外存在しない。従って、筆者自ら作成しなければならなかった。戦後に採用された『職員名簿』は、現在の北海道家庭学校作成のものがあるので、筆者は、戦前に採用された『旧職員名簿』の作成にとりかかった。当初、筆者が手掛かりとしたのは、校長がその人となり信頼して学校の内務を一任した小塩高恒副校長の回想録である。

小塩の「フースフー」と題するこの回想録⁹⁾は、思いつくまま古い順に「留岡傘下に集まりし当年気鋭の人々を、指を屈して挙げて見」たものである。大いに参考にはなったが、厳密な史料とは到底言えない。当然、記憶違いもあれば忘却もあるわけで、それも本人の責任とは言えないのである。そこでまず、彼のこの記録を下敷きにしてそこに列挙されている人名ごとに、関係するあらゆる事項を『人道』（復刻版、不二出版、1983）、『留岡幸助日記』全五巻（矯正協会、1979、以下『日記』と略す）、『留岡幸助著作集』全五巻（同志社大学人文科学研究所編、同朋舎、1978、以下『著作集』と略す）を主とする関連資料から抜き出す作業を繰り返した。大多数が著名人ではないため、『人事興信録』以下の一般的な人名辞典類はあまり役に立たなかったが、家庭学校の性格からして『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986）、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988）記載事項に多くを教えられた。さらに、『人道』の「消息」欄は大変有益であった。最終的に個々の職員を知る手掛かりとなった文献・資料は数多い

が、紙数の制約から、それらは別の機会に明記することとしたい。

ただし、筆者の調査範囲は社名淵分校と現北海道家庭学校関係の資料に著しく傾斜している。存命者からの聞き取りについてもそれが言える。そのため、戦中に巣鴨本校に採用された職員の幾人かを見落としている可能性がある。不完全ではあるが、この名簿をもとに、以下、職員集団の形成過程における特質を明らかにしたいと思う。

2. 採用の経緯

1) 地縁・血縁の縁故者たち

名簿の186名中、出身地が判明した者は101名、北海道をはじめあいまいな者が8名おり、それらを含めても全体の約59%に過ぎない。しかし、主要な職員の大半は判明している。彼らの多くは幸助の縁故者であり、偶然にこの施設を知って採用された者は数少ない。ただ、彼らの出身道府県別データが意味を持つとすれば、幸助の地縁との関わりである。そこで、まずその点を整理しておこう。

留岡幸助の主なライフ・ステージを国内に限定するならば、(1)高梁を中心とする岡山県全域、(2)愛媛県の今治、松山地方、(3)京都と府下の園部、綾部、福知山地方、(4)空知、札幌、遠軽を中心とする北海道全域、(5)巣鴨、茅ヶ崎を中心とする東京周辺、の五つのゾーンを取り出すことができる。ただし、(5)の東京周辺はここで言う地縁性が薄い。最も意味を持つとすれば、(1)~(3)の地域であろう。

留岡幸助の郷里は、岡山県上房郡高梁町（現在の高梁市）である。岡山県出身者を名簿順に抜き出してみる。横山さの子(3)、安藤とも子(10)、安藤さく子(12)、西村茂次(28)、三村春代(30)、横山有策(34)、高見登一(38)、鈴木(旧姓吉田)ケイ(55)、鶴見唯興(61)、大谷松太郎(71)、吉田常太郎(78)、吉田トモ(79)、品川(旧姓三村)貞子(83)、田頭(旧姓秋田)鶴代(100)、角名巽(173)の15名、うち横山姉弟、安藤姉妹、西村、鈴木、大谷、吉田(常)の8名は、高梁の出身であることがはっきりしている。吉田トモも、恐らくは夫常太郎と同郷であるに違いない。ちなみに、幸助

の先妻、夏子もそうであるが、名簿からは除外してある。なお、横山姉弟、鈴木、吉田夫妻の5名は幸助夫妻の親族であり、家庭学校創設直後に巣鴨で生まれた四男、清男(130)を加えて、名簿中の5名が留岡家の血縁ということになる。清男を除くと、彼らはすべて大正中期以前、とりわけ初期に採用されている。これは学校経営が軌道に乗る以前の混沌とした状況下で、人を得る難しさを嫌という程味わった幸助の止むを得ざる処置であったように思われる。逆の見方をすれば、13人もの子宝に恵まれた幸助一家の子孫は多数にのぼると思われるのに、後継者難からやむなくバトンを引き継いだ留岡清男以外、誰も家庭学校の経営と教育に携わって来なかった事実は、伝統のある民間施設の多くが、最も閉鎖的な意味での親族経営に走り形骸化していったことと対比されて然るべきであろう。

愛媛県出身者は、上野(旧姓竹村)百合(2)、留岡(旧姓寺尾)菊子(6)、河北伸代(37)、今井新太郎(170)の4名に過ぎないが、いずれも重要な役割を担った。

京都府出身者は、谷平吉(4)、小塩高恒(7)、井上良三(20)、神田重慶(92)、小川実也(103)の5名であるが、周辺の資料から明田つる(9)、吉田清次郎(11)、塩見平之助(64)は、いずれも丹波地方の出身であると思われる。また、前田則三(87)は札幌の出身であるが、両親が丹波から移住しておりここに地縁性がある。全員が大正中期までに就職していて、学校の基礎固めと対社会活動に尽力した。

この二つの地縁グループは岡山県出身の第一グループと混じり合い、しかもより深く学校の柱石として事業に関わったと言える。おおむね、学校経営の基礎を固め家庭学校を軌道に乗せたのは、これら三つの地縁・血縁グループであったと言っても過言ではない。

北海道出身者を特定することは、ここが一貫して内地(本州)からの移住地であったという理由から難しい面がある。出身地を「出生地」とするよりも「幼少期の大部分を過ごした地」とするならば、前田則三(87)、三沢正男(128)、西村ヨシ(138)、斉藤節(145)、泉秀子(157)、見上獄越(159)の6名である。なお、東北地方の出身者が13名いるが、うち鈴木良

吉(54)は、札幌農学校出身で社名淵分校創設の中心人物であり、獄越の実父見上熊吉(154)は秋田からの移住者であるから、ここに位置づけることもできる。北海道出身者は、調査がさらに進んでいけばもっと増えたはずである。齊藤金三郎(88)、高柳長四郎(73)、両獣医も恐らくそうであろうが、確定には至らなかった。東京の大学を出て巣鴨本校を手伝った見上を除き、全員が鈴木を助けて社名淵分校の基礎固めに苦闘したことは言うまでもない。なお、紺野春男夫妻(152,153)も北海道出身だと判った。

2) 縁故採用の異端者たち

幸助との縁故で採用された者には、現代人の常識を破る人物が少なくとも三人含まれている。まず、元自由民権運動家の種村鎌吉(14)。彼は名古屋事件で無期刑の判決を受け、1897年7月出獄している。1891(明治24)年5月から1894年4月まで、幸助は空知集治監教誨師として囚人に接し、幾人かに受洗、出獄人を自宅に寄宿させて農業に従事させたりしている。政治犯として幸助と出会った種村が、息子を伴って家庭学校教師に採用されるのは出獄して4年後、満50歳の時であるが、退職時期、没年は不詳である。²⁾ 彼は、一体どんな想いで家庭学校を駆け抜けていったのであろうか。

好地由太郎(31)もまた、空知集治監囚徒であったが、こちらは政治犯ではない。強盗殺人の罪を犯して入監した彼の履歴は、自伝『恩寵の生涯』(警醒社、1917)他に詳しい。³⁾ 退職後は世の偏見と迫害に会いながらも、東京浅草を拠点に各地で基督教伝道に奔走している。鶴見欣次郎(60)にいたっては、なかなかふるっている。本名、堀本貞一、元小説家で窃盗犯の前科を持つ彼の後半生は、家庭学校とともにあった。退職時期は幸助の没直前であり、長期にわたって校長の秘書役として立ち働いている。人は良いのだが気が利かない所があって、「来客の前でよく校長に叱られていた」(上野他七郎(1)の長男、一雄氏談)。「ツルキン」の愛称で皆に親しまれ、重宝がられた彼の頭髪の具合を聞きもらしたのは何としても残念である。

必ずしも異端とは言えないが、生徒が教師になった例がある。感化学校の卒業生を教師に採用する方式は、今日から見ればやはり型破りである。

しかし、創設期の巣鴨で学んだ河北秀雄(36)のように、10年勤務した後、新設の公立施設に責任の重いポストで迎えられる卒業生がいたことも事実である。他に、家庭学校の卒業生が判っているだけでも数名、本校と社名淵分校で実業部門の助教師、助手として勤めている。労働力不足を補う意図が、幸助らに全く無かったと言えようそになるであろうが、そこには彼らの人柄と力量を信頼して、学校の仕事の一部を任すことができるという判断があったのであろう。悪意にとれば「宣伝材料にしている」という見方も出てこようが、家庭学校設立の理念と幸助らの「平等観」からすれば、母校出身の教職員を積極的に受け入れる精神的基盤が、学校側に存在したと判断すべきではないだろうか。

社会福祉実践のすみずみにまで高度の専門性が求められている現在ではあり得ないことであろうが、こうした職員採用方式が存在した歴史的事実の中から、むしろ今日的意義を引き出すことが求められている。人間を一時期の属性から固定的にとらえ、差別と偏見の鎖で縛りつけておこうとする風潮を、私たちはいまだ払拭しきれていないからである。

3) 縁故採用の仲介者たち

家庭学校史は、留岡幸助を中心とする人脈に支えられ多彩な展開を遂げた。その人脈は、全貌をつかむことが困難なほど壮観である。⁴⁾ それは、誰よりも幸助自身が開拓した財産であった。しかし、「類は友を呼ぶ」の例え通りに事が運ぶとは限らない。人脈は、その中からさらに他者との関係をととりもつ人物—キイ・パーソン—を何人も生んでこそ、絶えず広がりを持する。彼らは、言わば人脈の結び目であり、山脈に例えれば“峠”なのである。

社会的目的を是非とも達成しようとする集団は、沈滞を恐れるが故に新陳代謝をはかり世代交代を促すことができ初めて、時代を貫いて生き残ることができる。そのための手段として、「地縁・血縁」という東洋的、ひいては極めて日本的な絆が用いられたことを、今日からどう評価するかは難しい問題である。そのことがとりわけ実践過程において、どのような利点を産みどのような悪弊を残したか。この点は、いずれにせよ当時の時

代状況と切り離しては論じられない。そうした絆のありかたは、「同志の結合」という表現に代表される「日本人の仲間意識」の源流と深く関わり合っているからである。⁹⁾

そこで以下、幸助が直接採用したケースを除き、名簿から浮かんでくる仲介者を取り出してみよう。ここでは彼らの詳細な履歴をいちいち紹介できないが、仲介者には二つのタイプがあった。一つは後援者群であり、二つは、既に採用された職員群である。後者については、可能な限り「備考」欄に明記した。特に目立つのは二代目校長、牧野虎次(139)の尽力である。そこで、ここでは前者に焦点を当ててみたい。なお、大学を中心とする人間関係については、一括して「学歴」の項で述べることにする。

第一群では、まず竹村百合(2)の恩師、松山女学校校長の二宮邦次郎がいる。彼は高梁出身の牧師、教育者で、かつて幸助が高梁小学校に学んだ時の教師でもあった。彼女は二宮の紹介で単身上京し、期待と不安におののきながら家庭学校の玄関に立った。後に幸助の後妻となって内助の功を尽くす寺尾菊子(6)を、郷里の盟友で順正女学校長の福西志計子に託したのも彼の配慮だったと思われる。福西女史は高梁教会最初の受洗者の一人で、基督教徒迫害に耐え、当時既に女子教育の基盤を築きつつあった。寺尾は福西宅に起居し女学校で学んだ後、家庭学校に入っている。

養弟、巖本捷次(16)を音楽教師として送り込んだ明治女学校長、巖本善治。基督教系の私学、明治女学校は当時巢鴨の庚申塚にあり、彼は家庭学校創設に際して土地選定にも関わっている。同志社から帝国大学医科大学を出、駿河台に東洋内科病院を開業していた高田畊安も熱心なキリスト教徒である。彼は留岡家のホーム・ドクターでもあり、妻夏子の最期を看取った。彼は、1899年、茅ヶ崎の海岸に南湖院(結核病院)を持つに至るが、隣接する土地に茅ヶ崎分校を開設することができたのは高田の貢献が大きい。同副院長、高橋誠一(109)、美也子(110)夫妻は、10年間余りを茅ヶ崎分校校医と兼務している。創設当時の巢鴨本校校医として『職員録』(1902.10)に明記されている主任医島述(18)については不詳であるが、さらに歯科、眼科の協力医(島述の項参照)についても高田の協力があったのでは

ないか。なお、ここに茅ヶ崎分校教師となって小塩高恒(7)、うた(8)夫妻を補佐する三島剛(112)が、直前まで結核で南湖院入院の病歴があったことを書き添えておく。

坂井義三郎(22)は、内村鑑三と留岡幸助の間を往復した人物である。これは、当時の二人の親交の深さからして当然であろう。他に、内村と深い関係のあった人物に金沢常雄(98)がいる。神経を病んでいた彼は、短期間ではあるが社名淵分校教師として礼拝にも当たっている。後に札幌独立教会牧師として活動するところから、内村の札幌農学校同期(二期)生で同教会の中心であり続けた札幌農学校教授(植物学専攻)、宮部金吾の尽力があったことであろう。この人格円満な自然科学者もまた、幸助と家庭学校の良き後援者であったからである。

幸助と井上友一との親しい間柄はよく知られている。東京府知事在任中に急逝した井上の長男、鼎盛(119)、耐子(120)夫妻の媒酌人でもあった幸助は、後見役として家庭学校に招き入れることを忘れなかった。鼎盛は病弱であった(戦中に結核で早世したと伝え聞いている)。空気も良く自然環境に恵まれた社名淵分校に、新婚の二人を送り出したのは幸助の暖かい配慮からである。井上夫人、鼎子が三井財閥の中心人物の一人で満鉄社長も務める早川千吉郎の実妹であったことも大きい。早川は、義弟のとりもつ縁で家庭学校理事に就任し、長期にわたり学校経営に携わっている。

幸助の最高の親友にして監獄改良の同志、有馬四郎助もまた有力な仲介者であった。蓑田(改姓安東)長義(50)は、有馬夫人の実弟であり、肥後正彦(74)、ミネ(75)夫妻も有馬の親族である。肥後は、小田原分監長として有馬を補佐していた時、親族を優遇してしかも経理上の不正があったとする有馬追及のぬれぎぬを着せられ、不遇の身からの転職であった。有馬が創設した私立の女子感化施設、根岸家庭学園(後の横浜家庭学園)の初代園長となる三村春代(30)、同学園教師となる古川清子(名簿の末尾参照)らを含め、これらの人々は、親密な二つのファミリーを相互乗り入れによってさらに強固に結びつける役割を果たした。三村と古川は、家庭学校内の慈善事業師範部で教育を受けた実践者であったと推測される。師

範部の果たした役割については後述する。

以上、取り上げた後援者群は、自らもまた「家庭学校の同行者」の別名で呼び得る一群であった。彼らは、この人脈を代表するキイ・パーソンではあっても、結び目の一部であったに過ぎない。特に注目されるのは、結びつけられた側が新たな仲介者とその予備軍に育っていった点である。

3. 学歴と在職期間

1) 高学歴者と学校の種別

最終学校名までわかれば、最も正確な意味での学歴判明者ということになるが、彼らは高等教育を受けた者にほぼ限られる。男性では専門学校や大学、女性では高等女学校がそれに該当する。最終学校判明者は68名、うち6名が中退者である。不明者に校医、獣医、牧師、教育者、新聞記者の職歴を持つ者が11名いる。他にも、前後の履歴から明らかに高等教育を受けたと思われる者は数多い。一方、高等教育を受けていない者（尋常小学校、高等小学校卒業）は前述の卒業生たちを除くと少数しかわかっておらず、名簿は職員の学歴を全体として把握できる基礎資料ではない。名簿作成の目的も学歴調査ではなかったので、副次的に明らかにされた偏りの大きい事実から、あえていくつかの特徴を指摘してみたい。

第一は、同志社出身者が圧倒的多数を占めていることである。68名のうち、同志社系（大学、中学校、女学校、女子部高等科、専門部等のいずれかを経ている者）が16名を占め、次いで東京帝国大学8名、早稲田大学5名、札幌農学校・北海道帝国大学3名、法政大学、慶應義塾大学、明治学院各2名、後は、東京農業大学、明治大学、立教大学、長崎高商、東京外国語学校等、1名の学校が続いている。⁹⁾ 同志社以下の上位4校で計32名、全体の約半数を占める大きな比率である。しかも不明者の中には同志社出身と推測される者が若干名いるから、これら4校に占める同志社の割合はさらに高くなるであろう。つまり、断然のトップということになる。

同志社人脈のネットワークは、言うまでもなく、この学校の財産である。家庭学校創設当初の支援者層の中核となったのは、同志社の学風を体現す

る人々であったし、幸助亡き後の学校運営を担うべき校長職も、第二代、牧野、第三代、今井と同志社出身者が引き継いできた。同志社出身者が断然多くても、何ら不思議なことではない。そこで、このグループの内容に立ち入ってもう少し検討を加えるならば、①家庭学校史の中核となった人々を多数輩出したこと、②殊に、女教師、保母、主婦（夫婦で運営する家族舎にあって、生徒の日常生活指導にあたる職員）等の呼称で、この学校が重要視した女性職員に人材を送り込んだこと、③同志社リンケージが、創設期に偏らず絶え間なくこの学校に人材を派遣し得たこと、④そうであるが故に、このグループが家庭学校の建学の精神であり、思想的なバックボーンであった基督教主義の伝統を守り抜く上で大きな貢献をしたこと、以上の要点を抽出することができる。

第二は、出身学校の数の違いは、学閥による結果ではなく、むしろ家庭学校人脈のなせるわざであったことである。例証のトップに留岡幸助の子どもたちのケースを取り上げてみよう。幸助の実子は13人と多いが、学歴は当然多岐にわたる。最高学府に学んだ者も多いが、同志社を出た者は筆者の知る限り皆無である。幸助の子育てには、子どもたちの進路を同一のコースで考える癖があった。理由は定かではないが、とにかく定型をこしらえてしまったのである。まず近隣の巢鴨にある豊島師範付属小学校に入れ、男子なら早稲田中学校、女子なら高等女学校、出来が良ければ男子は仙台の二高から帝大、女子は女子師範、出来が悪ければ後はケースバイケースというわけである。その結果、双六のあがりのように長男、三男、四男が東京帝国大学、八男が京都帝国大学、三女が東京女高師まで辿り着き、次男は横道にそれて海軍兵学校に進んだ。獣医学校に進んだ者もいれば、途中で挫折した者もいて当然である。気になるのは、東京帝大に進んだ3人の男子と先の同校卒業生8名との関係であるが、実は全く無関係なのである。

この特異な学校は、格別骨の折れる子弟を預かって教育する社会的使命を帯びていた。一般公募で優秀な人材をかき集められるわけがない。同志社グループのキイ・パーソンとして牧野虎次（139）が重要な役割を果たしたと同じように、その他の学校にも“結び目”役がいたと考える方が自然

である。

東京帝国大学出身者8名の内訳を調べてみると、勤務年数が不明確だったり難波義雄(84)、菊地慎吾(名簿末尾参照)のように、思斉塾の卒業生が一時的に手伝ったケースも十分考えられる。高橋校医、金沢牧師(先述)、留岡清男と消していくと、通し番号の若い農科大学卒の3名に行き着く。彼らをあっ旋したのは、農科大学教授で家庭学校理事を務めた原熙であろう。助手を二人(49,53)、園芸部教師として送りこんだが後が続いていない。このグループのうち、本腰を入れて家庭学校に赴任してきたのは、高野一司(76)だけである。なお、難波(菊池もそうではなからうか)の恩師で刑法学者の牧野英一も、家庭学校とは深い関係にあった。

早稲田大学出身者は、横山有策(34)の影響が大きい。彼は高粱中学校卒業直後上京、家庭学校に寄宿して東京専門学校(在学中に早稲田大学となる)文学部英文学科に学ぶ。留学後、早稲田中学校教諭、早稲田大学講師を経て、坪内逍遙の後任教授としてシェクスピアを講じるが早世した。少年時代から思斉塾に入り、苦学しながら早稲田を出た錦古里忠治(51)を含め、横山の早稲田人脈が駆使された結果である。細越省一(46)、本井嘉一(117)、小島幸治(135)ら、いずれも芸術家肌、学者肌の人材であった。先の幸助がつくった定型は、早稲田中学校以外すべて授業料の安い官立の学校を渡り歩くコースである。早稲田が一つだけ紛れ込んだのは、この甥のせいではあるまいか。

いわゆる北大関連では、医学部出身の校医、斎藤節(145)を除けば鈴木良吉(54)、芹沢醒(85)の2名、背後で仲介したのは南鷹次郎教授(札幌農学校二期生)である。南は農学校専攻の地味な学究で、長く付属農場長を兼務し北海道帝国大学が創設された後に総長を務めている。南の家庭学校への貢献は、教え子を送りこんだにとどまらない。例えば、弟子の加藤木保次(当時、道庁技師)は、専門的な立場から『開墾起業設計』(1972.2.毛筆和紙冊子)を作成して社名淵分校、農場の開設に貢献している。その他の学校では、法政大学卒の出原満収(127)、田中民祐(131)、東京農大卒の大泉栄一郎(121)は、両大学で教鞭をとっていた留岡清男(130)が介

在している。東京外国語学校を中退して東京府立松沢病院に勤務していた前田則三(87)を、自分の後任に推薦したのも彼である。かくのごとく、学閥が働いた形跡は全く見られないのである。

2) 在職期間

第一群は当該欄に年月までが記入されていて、在職期間が確実にわかる者である。第二群は年のみの記載者と、欄内に「頃」、「夏」、「末」のような表示がある者で、誤差は小さくいわゆる“アバウト”の範囲である。第三群は「?」の表示がある(その年月または年であることを想定する資料があったが、確証はなく1、2年の誤差もあり得る)者と、一方が空欄であっても既に判明している諸事実(「備考」欄の「永年勤続表彰」、前後の『職員録』記載事実他)から、在職期間のある程度の長短なら割り出せる者である。第一群は64名で、全体の34.4%でしかない。第二群が32名で17.2%、第三群が36名で19.4%である。これら以外の54名は、在職期間不明者である。その中には職員でなかった夫人(妻)、慈善事業師範部生、思斉塾生が多数含まれている可能性があるので、不明者を除く、132名を母数として考察するのが妥当なのかもしれない。しかし、ここには極く短期間で去っていったが故に不明である者もまた、かなり含まれているであろう。

正確とはいえ少数の第一群に、あいまいな第二、第三群までを加えて全体的な傾向を知るためには、基準のとり方を工夫してみる必要がある。そこで、在職期間1年、3年、5年、10年を基準に割り出してみると、結果は3年未満が50名(うち1年以内が18名)、5年以上が67名(うち10年以上が33名)という割合になった。数ヶ月という短期間で去っていった者も、判明しただけで18名いるが、彼らの「身分(後)」を見ると、進学、海外研修、応召、帰郷、病気療養、転職等様々であり、勤まらず逃げ出したというレッテルを貼るわけにはいかないように思われる。そうでなかったからこそ、筆者の調査網にかかったという判断もできそうである。3年以内の者は、初期の頃を除くと多くが転出先の判明者であるが、類似の職種や企業への転職、本務職への専念、結婚退職等のケースも多数ある。彼らは、学校の人脈ネットワークの中で働き、その多くはバトンを受けて、よくつないだ中継者で

ある。一方、5年以上の者はおおむね基幹部門の担い手であるか、地味な裏方に徹した者である。10年以上の者の大半が夫妻で、この学校の歴史を創り、歴史とともに生き、一切の見返りを求めずに退職していった人々であることは言うまでもない。しかし、全体としては、在職期間それ自体から大きな特徴をつかみ出すことはできない。その長短にかかわらず、そこには個別具体的な意味が込められているからである。

4. その他の事項とまとめ

校内の「役割」と「前後の身分」についても一応の整理をしておくべきであるが、後者については、名簿に記載した内容を参照してもらうこととし、ここでは前者について簡単に触れるにとどめたい。

職員構成群は、①学科(普通科、実業科)の教授と訓育にあたる教師群、②家族舎(後期は寮舎)での生活指導にあたる家族長(寮長)、主婦、保母群、③両群を補佐する助教師、助手群、④事務職員、その他の雑役係員群、⑤『人道』編集にあたる専門家群、⑥校医、獣医、看護婦、産婆らの専門職群になる。⑤は非常勤のジャーナリスト、学者文化人が大多数であり、⑥の校医は全員非常勤、看護婦、産婆については不詳である。常勤職員で同一職種にあった者はまれで、多くの者は兼務するか、移動している。本校、分校間の転勤もあった。高学歴者が①、②、⑤、⑥に集中しているのは当然であるが、高等小学校出身者が、その人柄と実技能力を買われて寮長を勤めたり、帝国大学出身者が事務職員となった例もある。副校長、教頭職は、不在がちな校長を補佐し、しかも学校全体の運営に責任を持つ激務であった。人柄の良さと高学歴だけでは、とても勤まるものではない。

初期の混沌とした職場事情においては、とりわけ兼務や代行が目立ち専門外の不慣れな業務をもこなさなければならない場面が多々あったが、大正中期以降になると次第に専門分化が進んでいったように思われる。しかし、こうした施設にあっては完全な専門分化などあり得ないし、また得策でもない。狭い業務に専念させず、あえて多くの職員を配置替えや兼務によって鍛えたことが、良い結果につながった側面もある。職域間、職員間

の不協和音が全くなかったわけではないけれども、そうした困難を乗り越えて日常実践を展開し得た理由は、やはりこの学校を内外で支えた層の厚さ、人材の豊富さに求められなければならない。

慈善事業師範部について、その全容を知る手掛かりとなる資料は得られなかった。確実ではないが、周辺の資料からかなりの精度で卒業生と判定出来る人々を名簿から割り出してみると、吉川亀四郎(19)、伊達初子(27)、三村春代(30)、品川義介(82)、古川清子(名簿末尾)である。師範部生は「練習生」と呼ばれていたようである。職員ではなかったが、他には師範部を出て仙台基督教教育児院保母となった佐藤春子がいる。吉川以下の人々がそうであったように、他施設で要職に就く場合が多かった。極く初期の頃の職員の多くは、採用の前後にここで学んだように思われる。

思齊塾生が、卒業を控えまた卒業して就職が決まるまで、一時的に校務を手伝った場合も多かったと思われる。高見登一(38)、錦古里忠治(51)の他、難波義雄(84)、三沢泰太郎、菊池慎吾(いずれも名簿末尾)の場合も恐らくそうしたケースではないだろうか。なお思齊塾については、本誌「研究ノート欄」の拙稿を参照されたい。⁷⁾

筆者の聞き取りによれば、夫婦で勤務した職員の場合、妻の方は無給であったようであるし、労働条件は決して良くはなかったであろう。反面、幸助らの尽力で若い優秀な職員を何人も、北米大陸に研修生として送り出している。その必要経費を捻出するために、幸助が奔走した形跡も多々ある。いずれにせよ職員名簿分析の帰結は、時代精神に裏付けられた「同志的結合」の性格内容に求められる。

注

- 1) 『人道』復刊第49号(1936年5月15日)所収。他に、小塩高恒「塵塚(六) - 亡き人」『人道』復刊第34号(1936年3月15日)所収、をも参考にした。
- 2) 永井秀夫編『北海道民権史料集』北海道大学図書刊行会、1986年、巻

末の「民権家経歴」による。

- 3) 出獄後の1907年に出版された『鉄窓の廿三年』(中庸堂)は、八版を重ねた。内村鑑三は「出獄と共に懺悔を売り物にしている人々などをも勘からず見受けます。」という談話を残している(『内村鑑三談話』岩波書店、1984年、340頁)。
- 4) 家庭学校人脈を知る手掛かりに、他に『理事・評議員名簿』以下、七種類の名簿を作成してみたが、その全容を明らかにできた自信はない。
- 5) 米山俊直は、日本社会におけるヨコ関係の特性を導き出すカテゴリーとしての「仲間」を、「世間、同胞、身内」との対比で考察している(『日本人の仲間意識』講談社、1976年)。
- 6) 岡崎喜一郎(141)は東京専門学校の中退者であるが、ここでは同志社系に含めた。なお、同志社大学社史資料室所蔵の「同志社大学沿革図解」によると、その変遷過程は実に複雑である。同志社系の人々の学歴は、明らかに誤りがあった場合を除き、原則として『日記』、『著作集』、『人道』等に記載されている表現に従った。
- 7) 高野山大学助教授室田保夫氏の御教示を得て、つい先頃、東京家庭学校所蔵の『思斉塾友名簿』(1923年12月調べ)と出会った。名簿には、133名の「出身地」「入塾年」「現住所及び職業」「出身校」が記されている(但し、空欄多し)。筆者のソフトデータは、全て関連資料から抜き出したものなので、この名簿にない者もいる。急ぎ分析を進めたい。なお、今井讓校長のご厚意で、貴重な元職員の『履歴書戸籍謄本綴』を閲覧することができた。旧職員で履歴判明者は84名、うち14名(社名淵分校2名)が筆者作成名簿から脱落していた。ただ、この資料にも限界がある。「退職願」のような在職を証拠づける書類が少ないこと、在職期間や転出先が判明しないこと、初期の職員に関する書類が欠落している(通し番号1~50では、8名分のみ)ことである。しかし、誤記を修正し、不明箇所を埋められたのは幸いである。但し、資料批判を尽くす時間がなかったため、通し番号は修正せず、全体構成も変えていない。同一人物のケースが一件あったが、そのままにした。

旧職員名簿一覽

【凡例】

1. 全体の構成

- (1) この名簿は、戦前の巣鴨本校、社名淵分校、茅ヶ崎分校に勤務した常勤職員、嘱託医（校医）と巣鴨本校の非常勤『人道』専任編集者（『人道』社員）を、原則として赴任順に配列したものである。
- (2) 理事、評議員等の役職者は、上記の者で兼務した者以外、ここでは省いてある。
- (3) 夫婦のうち、特に妻の中には職員とは言いきれない者も含まれているが、民間の事業を開拓した長い歴史を持つ“家庭学校ファミリー”を再現する意義からして、また誰がどういう位置で実際にどんな役割を担ったのか、その全容を今日の時点で把握することは不可能になっているので、ともかく記載順に通し番号を打った。

2. 名簿の項目

- (1) 「氏名」欄で夫婦の場合、妻または夫の赴任時期にこだわらず同一欄内に記入した。
- (2) 「就職、退職時期」は、西暦年・月まで表示することを原則としたが、年までしか判明しない職員が多数いた。なお、あいまいな箇所には？をつけ、おおよその時期を特定できても具体的に記入しきれない場合は、すべて空欄とした。最後に並記した6名については、明治期、大正期、昭和期という大雑把な特定しかできないので、通し番号を打っていない。
- (3) 校内での「役割」は、時系列に従って記入した。家族長を寮長と呼び変える時期、教師・保母・家事取締・主婦などの役割内容は明確ではないが、史・資料に記載されている呼称をそのまま記入した。
- (4) 「(前)身分(後)」は、家庭学校に勤務した時期の前、後の身分（職業・動向）を記入した。
- (5) 「備考」欄には、旧・新・改姓名の他、出身地、主要な履歴、人間関係

がわかる事項等を記入した。なお、年月日以外、カッコ内の数字はこの名簿の通し番号である。

3. 用いた略語と略字

巢・(巢鴨本校) 社・(社名淵分校) 茅・(茅ヶ崎分校) 道・
(『人道』編集者) 志・(同志社大学関連) 塾・(思斉塾生・卒業
生) M(明治) T(大正) S(昭和)

旧職員名簿一覽

No. 1

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前) 身分 (後)	(旧姓等) 備考
1 上野他七郎	1899. 10	1907. 3	巢・家族長 道・	名古屋英和学校 校生兼職員	金沢 志・号蓮湖 放送作家一雄 の実父
2 百合	1901. 5	1907. 3	巢・教師	中央報徳会幹事 松山女学校卒	(竹村) 松山 神戸女学院卒 留岡清男(130)の乳母
3 横山さの子	1900. 1頃	1901. 8	巢・教師	高梁教会員 神戸女子伝道学 校入学	(中村) 岡山高梁 幸助夫人夏 子姪 横山有策(34)実姉
4 谷 平吉	1900. 2		巢・教師	須知小学校 園部高等小学校 教師 訓導	京都丹波 後、船井郡立高女他 教師 職員録(1902. 10)に記 載なし
5 国分きく子	1900. 1頃	1901. 1	巢・	(転職)	
6 寺尾 菊子	1900. 4頃	1901. 6	巢・保母	高梁順正女学 (1933. 8. 19 没) 校生徒	(留岡) 松山 校長夫人 1901. 6 結婚
7 小塩 高恒	1900. 夏	1903.	巢・教頭 道・兼務	上毛共愛女学 神奈川県立薫育 校教頭 院主事	京都綾部 号静堂 志・東京神 学大学教授、力の実父 現中央
8 うた	1912.	1933. 5 1933. 5	副校長 茅・責任者 巢・茅・教師	同薫育院主事 小塩塾塾長 上毛共愛女学 校教師	大学教授、節の祖父 (広橋) 群馬 共愛女学校卒
9 明田 つる	1901. 1		巢・家事取締		職員録(同上) 記載あり 丹波?

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分(後)	(旧姓等)備考
10 安藤とも子 11 吉田清次郎	1901. 8 1906.	1907. 2 頃	果・教師 果・教師 道・兼務	清次郎と結婚 満鉄会社入社	(吉田)高梁 同記載なし 京都園部? 長男洞介、塾・
12 安藤さく子	1901. 8		果・		(仁科)高梁 とも子(10) 実妹 同記載なし
13 本田もと子	1901. 8		果・教師		同記載あり
14 種村 鎌吉	1901. 8		果・工業部教師	空知集治監仮 出獄	名古屋 名古屋事件に連座 指物 師 父子で勤務 同記載なし
15 寺尾 あい	1901.		果・家事取締		同記載あり
16 巖本 捷次	1901.		果・音楽教師	東京音楽学校 米国音楽院卒 卒	同記載あり 善治養弟
17 亀岡 統			果・実業教師		同記載あり
18 島 述			果・校医(主任医)	他に、村山鉦太郎(歯科)ドクトル・ホイットニー(眼科)高田 安(筆者注、内科)の協力あり(同記載事項)	
19 吉川亀四郎	1901. 末	1909. 9 頃	果・教師 幹事 道・ 兼務	練習生として 大阪汎愛扶植会 実習研究 教師	(改田村)高知 香川県立新道 学園長(1909. 10 ~ ?) 生徒観察記(1909. 9)あり
20 井上 良三 21 兵子	1902. 1902.	1906. 3	道・専従 後、兼務	志・学生? 神戸新聞社(道 ・を兼務)	丹波 号王山 後、内務省地方 局、文部省囑託 志・中退? (峰岸)

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分(後)	(旧姓等)備考	
22 坂井義三郎 23 美以子	1902. 春	1904. 12 秋?	巢・幹事	『独立教会 『美術新報』記者 雑誌』編集	金沢 元東京市養育院職員 上 野他七郎(1)実兄 幸助媒酌 1914. 6. 23 没	
24 原 真男	1902. 6	1903. 1	巢・体育教師	警察監獄学校 生徒?	生徒観察記(1902. 11. 12 ~ 1903. 1. 8)あり	
25 篠崎 篤三 26 八重子	1902. 9	1922. 2 1922. 2	道・慈善事業師範部 担当 社・巢・教頭	山口県社会事業 主事	横浜 号竹頭 北米遊学(1903 ~1909) (岡田)東京 次郎作の娘	
27 伊達 初子		1906. 3 頃	巢・家事取締	横浜監獄専任手 芸教授	同女子懲治場教師(1907.1~ 同7頃)以後、巢・に奇寓す	
28 西村 茂次 29 しげよ	1903. 頃	1911. 1911.	巢・教師 道・兼務	府立小笠原修斎 学園教師	高梁 号色即 生徒観察記あり (1906. 7. 21 ~ 1909. 5. 26)	
30 三村 春代			巢・	横浜監獄女子懲 治場教師(1907. 1 現在)	岡山 初代根岸家庭学園長 (1904. 4 ~ ?) 慈善事業師範 部卒業生か?	
31 好地由太郎	1904.	1905. 5	巢・家事取締兼実業教 師	神奈川監獄 仮出獄	伝道師 千葉 『恩寵の生涯』著者 後、 浅草駒形町に伝道館設立	
32 神代すみ子	1904. 秋	1923. 9	巢・保母 茅・主婦長	(一男一女の 未亡人)	関東大震災時に 殉職	(武田)和歌山 10年動続表 彰(1924. 11)長男勉一、塾・
33 山本忠次郎	1905. 頃	1914. 8	巢・会計庶務 道・兼務		学校敷地の旧所有者	

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前) 身分 (後)	(旧姓等) 備考
34 横山 有策	1905. 1912.	1906. 1919.	道・ 道・	早大文学部学生 渡米留学 ハーバード大留 早大文学部教 学 授	高粱 号鴨村 幸助夫人夏子甥 中卒後、巢・に寄宿す (多田)
35 艶子					
36 河北 秀雄	1906.5	1915.4	巢・家族長 道・兼務	巢・生徒 千葉県立生実学 校訓導	今治? (本籍地 山口)後、台湾へ
37 信代	1912.10	1915.4	巢・主婦	高等小学校教師	愛媛 松山女学校卒
38 高見 登一		1906. 末	巢・庶務 道・兼務	塾・ 古谷商会(シアトル 在)	岡山 渡米生活(1908~) (村岡) 菊三郎の娘 静岡?
39 玉子					
40 柏木 松雄	1906.1	1906.10	巢・教頭 道・兼務	米国慈善事業視 察	井上良三(20)の後任 号虚 堂
41 藤波 茂平	1906. 秋		巢・炊事担当(厨夫)		10年動続表彰(1916.11)
42 きん子			巢・ "		
43 堺 弥三郎	1906.12	1910.	巢・教師 道・兼務 (柏木の後任) 後、専従	在ハワイ太平洋 中央学館教師	青森
44 (夫人)					
45 渡辺亥三郎	1906.12	1907.4	道・	東京国民英学 病気療養のため 会卒 帰郷	新潟 国分東犀の弟子
46 細越 省一	1907.1	1912.1	道・	早大文学部卒 読売新聞社勤務中	盛岡 号夏村 詩人 後、岩手 県実業界に尽力

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前) 身分 (後)	(旧姓等) 備考
47 大村 実	1907. 1	1908. 1	道・		
48 生江 孝之	1907. 1	1908. 1	道・	神戸市外事係 内務省嘱託	仙台 青山学院卒 後、理事 理事長 日本女子大教授
49 井幡 順造	1907. 4	1908. 8	果・園芸部教師	東京帝大農科 大学助手	農学士
50 養田 長義	1908. 3頃	1913.	果・教師 道・	同志社大学理事	(改安東) 鹿児島 有馬四郎助 夫人実弟 志・
51 錦古里忠治	1908. 4	1912. 3	果・幹事 道・編集主任	早大商学部卒 函館訓育院主事	千葉 塾・生徒観察記(1909. 4. 17 ~ 1913. 5. 22) あり
52 多賀子	1922. 1	1928. 3	果・庶務会計主任	横浜で実業に従事	
53 駒田 孝義	1908. 9		果・園芸部教師	東京帝大農科 大学助手	農学士
54 鈴木 良吉	1913. 11	1962. 3	果・教師 社・農場主任	朝鮮扶植農場 遠軽在住	秋田 札幌農学校農芸科卒 元東 北帝大農科大学助手 1966. 没 (吉田) 高梁 幸助姪
55 ケイ	1914. 6	1962. 3	教頭 副校長 社・主婦 教師 教母	遠軽在住	
56 中村孝三郎	1909. 10		果・家族長兼西洋洗濯 部主任		福岡 夫妻10年勤続表彰(1919. 12)
57 梅子	1909. 10		果・同部主婦		
58 吉田 直子		1911. 4	果・看護婦	修斎学園教師橋 本静と結婚	西村茂次(28)とともに小笠 原へ

氏 名	就職時期	退職時期	役 割	(前) 身 分 (後)	(旧姓等) 備 考
59 豊崎善之助	1909. 1	1910. 1	道・	人民新聞幹事 『基督教新聞』 編集	ユニテリアン派 元社会主義研 究会幹事
60 鶴見欣次郎	1910.	1933. 10頃	巢・庶務 家族長 道・兼務	全日本私設社会 事業連盟内社会 事業交換局	講師として各地を巡回 校長 秘書役
61 唯興	1912. 10		巢・主婦		(井口) 岡山
62 近江 匡男	1911. 1	1912. 1	道・	報徳会機関誌『斯民』記者兼務	
63 井口 丑二	1912. 1	1913. 1	道・	長崎日々主筆 中央報徳会幹事	長崎
64 塩見平之助			巢・家族長 道・兼務		丹波? 号雪苑 友之助実父
65 難波 勇子		1916. 6.頃	巢・教師	真山次郎と結婚	(真山)
66 辻 雅俊	1914. 8 頃	1916. 8 頃	巢・顧問(事務主任)	滋賀県立淡海 学園長	彦根 元長浜警察署長
67 (夫人)					
68 福田 福松	1914.	1914. 11	社・農場主任		(上野改?) 塾・? (袖山)
69 りく子			巢・教師 社・		
70 中山 敢造	1914.	1914. 11	社・農場農業主任	応召入宮	気球隊
71 大谷松太郎	1915. 3	1931. 3	巢・会計 道・兼務		高梁 勤統10年表彰(1924. 11) 後、倉敷在住
72 ツル		1929.	社・庶務会計主任 社・主婦		(松崎)
73 高柳長四郎	1915. 1	1916. 10	社・畜産部教師	獣医 岩瀬蹄鉄屋開店	北海道?

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分(後)	(旧姓等)備考
74 肥後 正彦 75 ミネ	1915.2.頃	1916.2	巢・風紀係	千葉監獄詰 宮崎県立慎修学校長	前小田原分監長兼横浜家庭学園幹事(庶務・会計・訓育) (有馬)鹿兒島 四郎助末妹
76 高野 一司 77 (夫人)	1915.6 1915.6	1921.3 1921.3	社・農場農業主任 社・	群馬県利根郡 農会技手	東京帝大農科大学農学実科卒 1915.6.30 東京発、夫人とともに1915.7.4 社・着任
78 吉田常太郎 79 トモ	1915.?		社・理髪係 社・炊事係		高粱 幸助甥 (大西)高粱?
80 片田もと子	1916.1		産婆		
81 遊座 徳弥	1916.6	1918.6頃	巢・会計主任(募金)	鉄道院書記 盛岡で寺院生活	盛岡
82 品川 義介 83 貞子	1915.3 1917.5	1925.12 1925.12	社・教育主任 家族長 (掬泉齋長) 社・主婦	感化教育練習生 民間感化事業家主 (琴似白雲山荘主)	山口 志・中退 号我羊 牧野 虎次(139)の紹介 1982.8.14 没 (三村)春代(30)実妹 岡山
84 難波 義雄	1916.7	1917.4	巢・職員 日曜学校主任	東京帝大法科大学卒 東京市救済事業囑託	塾・? 後、同市社会局保護課長、関東庁勤務 法学士 勇子(65)実弟?
85 芹川 醒	1916.6	1917.10	社・農業教師	東北帝大農科大学卒	大阪 農学士(農学科第一部)
86 山村 清治	1916.7		巢・木工部助教師 同教師 家族長	巢・生徒	新潟

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分(後)	(旧姓等)備考
87 前田 則三	1915.4 1932.12	1921.3 1934.11	社・教師 果・事務 社・教頭	東京外国語学 東京府立松沢病 校中退 院治療教育部看 同看護長 護長	札幌 英吉長男 夫人は加藤晋 佐次郎(144)実妹 留岡清男(130)の後任
88 斎藤金三郎	1916		社・農場 獣医		空知農業学校獣医科卒?
89 瀬田卯之助		1918.6頃	果・木工部主任	木工製作の店舗 経営	
90 佐坂 甚吉	1915.5	1933.3	果・農業部助手 社・ 農場農手	農業 ブラジルへ移住	水田試作に成功 校長に“田舎 博士”と呼ばれる
91 加藤 清丸	1915.		果・社・農場教師	渡米	1915.4 篠崎らと社・着任
92 神田 重慶	1917.9	1929.7	社・農場倉庫部 養鶏 部長	札幌北三条 病気療養 郵便局長	丹波 神田重雄親族? 札幌独立 教会信徒 大阪府立中学校卒 創設時の果・で家事手伝い
93 まき子	1917.?	1932.	社・主婦		
94 木塚 達子	1918.5	1920.1	果・教師	栃木県三好村に 帰郷	(葛貫) 栃木
95 生方文次郎	1918.	1920.	社・家族長助手		
96 阿部 喜平	1918.10	1929.7	社・畜産部主任 家族 長	旭川滋賀農場 (1937.7.没) 牧畜部支配人	愛知 県立農学校獣医科卒 元陸 軍獣医 北海道で農場経営 (1912~1916)
97 梅子	1937.11		社・事務職員		

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前) 身分 (後)	(旧姓等) 備考
98 金沢 常雄	1919.		社・教師 (石上館に数ヶ月滞在)	東京帝大法科大学卒 札幌組合教会牧師	群馬 前桐生教会牧師 後札幌 独立教会牧師 内村鑑三の弟子
99 小島 玄達	1919. 頃	1923. 初	巢・教育部学科教師	津市小学校長	津 三重県師範学校卒
100 秋田 鶴代	1920.	1929. 3	巢・教師 社・家族長 女子冬期学校主催	同志社女子部 高等科卒 田頭千代吉 (在 パークレー牧師) と結婚渡米	岡山 米国留学 (1923. 6 ~ 1926. 2) 後、広島に疎界中原 爆で没
101 幸田金三郎	1922. 11		社・家族長助手 茅・ 教師	救世軍下士官 北海タイムス記 者	茨城 詩人
102 山本 静也			道・		同志社中退
103 小川 実也	1920.	1932.	道・日曜学校長	日の出新聞・教育評論家 中外日報記者	福知山 立命館大学中退 号垂村 牧野虎次(139)の紹介 志・聴講
104 寺崎 好	1921. 4	1969. 3	社・教師 土木部、野 菜部主任	家業 (農業) 校内の博物館管 手伝い 理	群馬 札幌在住
105 カツ	1927. 7	1969. 3	社・保母 教母	婦人矯風会助手 (1983. 10. 1 没)	(高平) 仙台 守屋東の紹介
106 横山 義頭	1921. 6	1969. 3	社・茅・教師 教務主 任 副校長	山梨県農事試 谷昌恒新校長の 験場助手 補佐にあたる	山梨 県立農林学校卒 1977. 2. 21 没
107 せつ子	1928. 5	1969. 3	茅・社・保母 教母	大手前高女卒 校内に居住	(前中) 兵庫 1981. 3. 2 没
108 井伊 松蔵	1921.		社・教師 (礼拝他)		鳥取教会牧師 数ヶ月滞在
109 高橋 誠一	1923. 1	1933. 3	茅・校医	南湖院副院長 (内科医)	島根 東京帝大卒 医博
110 美也子	1923. 1	1933. 3	茅・校医協力者	” 医師	岩手 東京医学校卒

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分(後)	(旧姓等)備考
111 三島 剛 112 知恵子	1924. 5 1924. 5	1928. 11 1928. 11	茅・教師 家族長 茅・主婦	台湾銀行(療養)	富山 長崎高商卒 1933. 1 没
113 岸野喜三郎 114 (夫人)		1939. ?	社・白滝第二農場助手 社・牛舎主任	東京の病院車夫 白滝で農業に " 手伝い 従事	
115 松田 茂 116 (夫人)	1926. 6	1933.	社・寮長 冬期学校教 師 茅・教師	ホーリネス教 会牧師	兵庫 聖書学院卒 掬泉寮失火 焼失
117 本井 嘉一 118 文子	1927. 4 1929. 12	1929. 3	社・寮長 冬期学校教 師 社・冬期学校裁縫教師	東京成城中学 成城高校長 校教諭(国語)	富山 早大文学部英文学科卒 歌人 横山有策(34)の紹介 (三宅)
119 井上 鼎盛 120 耐子	1929. 5 1929. 12	1932. 7 1932. 7	果・会計助手 社・学 科、日曜学校教師 社・日曜学校教師	慶応義塾大学 三井報恩会 学生 東京府立第一 高女卒	東京 友一長男 幸助の媒酌 (田中)工博、不二の娘 東京 戦後、矯風会職員
121 大泉栄一郎 122 久子	1927. 4 1932. 12 1932. 9	1929. 3 1969. 3 1969. 3	果・教師 茅・教師 社・寮長 畜産部主任 社・保母	東京農大卒 校内の図書館管 理 神戸孤児院保母 校内に居住	宮城 留岡清男(130)の紹介 1984 没 (稲坂)兵庫 同志社女学校卒
123 穴倉 元	1927. ?		茅・教師		早大政経学部教授林葵未夫の義弟
124 広津 友信 125 はつ子	1928. 4	1932.	果・顧問兼幹事 道・	山形高校生徒監	柳川 志・エール大、ハーバード 大留学 (甘槽)新島襄夫人養女

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏名	就職時期	退職時期	役割	(前)身分 (後)	(旧姓等)備考
126 栗原弘三郎	1927.		社・数学教師	京都市技師	東京 大阪高等工業学校卒
127 出原 満収	1929. 3	1931. ?	社・寮長助手 教師	法政大学法文学部卒	掬泉寮長留岡清男の助手、田中民祐(131)と予科同級
128 三沢 正男	1929.	1933.	社・畜産部主任(但し個人経営)	徳川家牧場管理	宇都宮仙太郎の推薦 戦後道会議員 洞爺丸事件で没
129 ヘルタ		1933.	社・		ドイツ人
130 留岡 清男	1929. 8 1949. 4	1933. 2 1977. 2	社・教頭兼寮長 社・校長 理事長	法政大学教授 教科研幹事長 法政大学教授 1977. 2. 3 没	幸助四男 東京 号清溪他 戦後、北大教育学部教授を兼務 東京帝大文学部心理学科卒
131 田中 民祐	1929. 9	1932. 3	茅・教師	松沢病院教育 治療部看護人	愛知学院教諭 長崎 法政大学予科卒 戦後 福島学園長(1948~1965)
132 岸本 種次	1929. 10		社・巢・書記 教師	役場吏員	兵庫
133 斐子	1936. 8	1971. 11	社・会計主任	平和写真製版所	(大亦)
134 相田 良雄	1929. 1	1932. 1	道・	看護婦	
135 小島 幸治	1929. 1	1930. 1	道・	内務省地方局嘱託	大分? 号彦堂 元内務省事務官
136 横山 春一	1930.		社・巢・農場管理	早稲田大学高 社会事業研究所 等学院教授 研究員	号三余 早大文学部(西洋史)卒 戦後、日大教授
137 西村 忠三	1933. 5	1951.	社・職員助手(牛馬の飼育他)	明治学院卒	『賀川豊彦伝』著者
138 ヨシ		1951.	社・保母	社・小作農 遠軽小学校小使	滋賀 10有余年勤続(1944. 9現在) 北海道

氏名	就職時期	短職時期	役割	(前) 身分 (後)	(旧姓名) 備考
139 牧野 虎次 140 繁意	1933. 3	1938. 12	校長 顧問	大阪府嘱託 同志社総長事務 取扱	滋賀 後、志・理事 理事長 同志社総長
141 岡崎喜一郎 142 ハルノ	1933. 12 1933. 12	1936. 12 1936. 12	果・少年寮(新設)主 任	郷里島根で学 小笠原姉島に家 校経営他 庭塾創設	島根 同志社普通学校卒 東京専 門学校中退
143 中村 應	1933. 10	1935. 2	社・教師	高知県社会 横浜市労働訓練 事業主事補 所主任	茨城 後、中央融和事業協会 牧野虎次(139)の紹介
144 加藤 普佐次郎	1933. 12		果・嘱託(校医、鑑別 ・診察に従事)	世田谷区北沢町にて開業	愛知 前東京市立戸山脳病院長 医博 後、明法学部教授
145 斎藤 節	1933. ?		社・嘱託(校医)	遠軽町仲通にて遠軽病院 開業	岩見沢 前北海道帝大医学部助 手 医博
146 丸岡 千夫 147 翠	1933. 1934.	1937. 2 1937. 2	社・農業部助手 寮長 会計	道内で農業に 南米に天理教布 従事 教中に事故死	宮崎 元大連市正隆銀行勤務 大泉栄太郎(121)の紹介 (橋詰)
148 武井 守善 149 喜代子	1933.	1935. ?	社・茅・音楽教師	明治学院卒 旭川市役所	東京 男爵家 幸助の紹介 (中村) 1934. 12 結婚
150 杉野 多吉 151 清	1935. 1	1945. 3	社・農場助手	北見拓殖実習 サロマ湖の開墾 場修了 地入殖	大阪 寺崎好(104)の紹介 (小倉)

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏 名	就職時期	退職時期	役 割	(前) 身 分 (後)	(旧姓等) 備 考
152 紺野 春男 153 富士見	1935. 2	1941. 1941.	社・教師 畜産主任 社・保母 (平和寮)	十勝種馬所農 耕部	北海道 幸助親戚? 牧野虎次 (13 (139)の紹介 北海道
154 見上 態吉 155 マサエ	1935. 7 1935. ?		社・白滝農民道場主任 同農場主任 社・白滝済美館保母	農業 白滝で農場経営	秋田 獄越 (159) 実父 元秋田県 浅舞町実業専修学校牧師 (渡辺)
156 鈴木 春治	1935. 8		果・書記兼教師 主事 兼会計主任	天産商店 (株) 監査役	千葉 日大殖民科修了 職員録 (1939. 11) に記載あり
157 泉 秀子	1935. 11	1937. 8	社・女子部教師	樺戸郡浦臼村に 帰郷、病氣療養	北海道 弘前高校教授未亡人 牧野虎次 (139) の紹介
158 寺田 寅雄	1935. 11	1936. 9	社・白滝農場助手	(帰郷)	秋田 見上主任 (154) の助手
159 見上 獄越	1936. 3		果・書記	明治大学卒	北海道
160 佐藤 亀男	1936. 6	1939. 12	果・書記兼教師	福島県庁農務 課	福島 (改姓名、野口尚道) 会津農林学校卒
161 吉益 正夫	1936. ?	1938. 5	社・農場助手 (馬の飼 育)	北見拓殖実習 応召入宮 場入場	社・卒業生 復員後結核で早世
162 北村 良明			社・農場助手	社・生徒?	職員録 (同上) に記載あり
163 山口 定夫			社・農場助手	社・生徒	

氏 名	就職時期	退職時期	役 割	(前) 身 分 (後)	(旧姓等) 備 考
164 佐藤 尚道	1936. 6	1939. 12	果・教師 教務主任	司法省少年保護 事業研究所入所	(改野口) 佐藤亀男(160)の 項参照 会津 1939. 3 結婚
165 千代		1939. 12			
166 松本基五郎		1940. 3	果・書記補		同記載あり
167 鈴木 鈴子			果・		同記載あり
168 白坂 直悦	1930.		果・	京北中学校卒	鹿児島 同記載あり
169 中出 正信	1938. 3	1938. 8	社・酪農部	応召入営	
170 今井新太郎	1939. 1	1949. 3	校長	京都西陣教会 東京家庭学校(養 護施設)長 牧師	松山 志・米国ユニオン神学校卒 現東京家庭学校長、譲は次男 戦 後、杉並区議会議員
171 文子	1939. 1				
172 沢村 速生	1939. 8	1939. 10	果・教師兼書記	尋常小学校長	宮崎 熊本師範学校卒
173 角名 巽	1940.		果・教務主任(野口尚 道の後任)		岡山 志・神学科社会事業学専攻 卒 文学士
174 佐々木 鉄太郎	1938. 10	1942. 10	果・助教師 教師	福島県下の社 国立武蔵野学院 会教化団体指導 教護職員研修生	福島 安積学範塾卒
175 木下外喜夫	1940. 3		果・書記	製作所勤務	富山 志・神学部中退
176 安松 宏	1940. 4		社・果・寮長	香川県立斯道 学院教諭	高松 志・夫妻で戦後まで勤務
177 ふさえ	1940. 4		社・果・保母	愛媛県立家庭実業学校保母	同志社専門部家政科卒

戦前における家庭学校職員集団の形成と特質(土井)

氏 名	就職時期	退職時期	役 割	(前) 身 分 (後)	(旧姓等) 備 考
178 古谷 一雄	1942. 4		巢・寮長	立教大学商科卒	新太郎(前大阪少年審判所長、長男)
179 (夫人)	1942. 4				
180 中村 政次	1942. 9		巢・寮長	福島県立双葉中学校教頭	
美濃部瀧吉	M		巢・校医	巢鴨監獄監獄医	1930.没 俊吉、達吉の兄弟?
三沢泰太郎	S	S	茅・	慶大政治学科卒 中央社会事業協会 (塾・?)	北米留学(1936.8~1937.9) 戦後、東京瓦斯電気工業取締役
秋山 竹雄	S		巢・書記		
菊池 慎吾	S	S	巢・	東大法律学科卒 京城地方院検事 (塾・?)	岩手 戦後、仙台地検他検事
古川 清子	T	T	巢・	横浜家庭学園教師	(佐々木)大正初期の慈善事業師範部生か?
大西 直子	T ?	S	社・炊事婦		1929.8.24 農場教育満15年記念表彰